

令和元年十二月吉日初版作成

消えてゆく姿のみ教えを

完全にマスターする

高嶋 善三郎

目 次

- 消えてゆく姿のみ教えのねらい・・・・・・・・・・・・・3
- 神のみ心に乗るために現わし消されている・・・・・・・・・・6
- 今の自分は創造主の分身・・・・・・・・・・・・・7
- 消えてゆく姿のみ教えの正しい行じ方・・・・・・・・・・9
- 真我（大我の光）を取り戻した時すべては光となる・・・・・・・・11

お 願 い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

「消えてゆく姿」という言葉の奥には、永遠につながる善いもの本もの姿がはっきり存在している、消えてゆくに従って、その本ものの姿がはっきり現われて来るのであるという、真理を知らない人、そこに現われた不幸災難や、環境の悪さをしっかりとつかんでしまい、せっかく消したものを又つかんで放さぬことになり、二重の因縁として業生の層を厚くしてしまっていると言われています。

「消えてゆく姿」という言葉を使って、善人たちが少しの事や、過去にならないうちにもいろいろなことを、自分を責めているのを、すっぱりと赦してしまなうようにして、神様が私(五井先生)を通して、世界平和の祈りと細言わせて、説かせてもらったものだと言われているのです。

「ただ単なる消えてゆく姿では、虚無的な、諸行無常的な匂いをもつが、その底に光り輝いている神仏、守護霊、守護神の姿を画き出すと、禍災じて福と為す式の光明思想となるのである。」(1995年4月号10ページ)

「私が消えてゆく姿を説いているのは、その奥にこの現象界の出来事は、何もかも時間的経過に於いて、過ぎ去り消え去ってゆくもので、変じ滅してゆくものである。ただ実在するものは神のみ光であり、神のみ心であり、神の理念のみであるという、真理があるからであります。」(1998年12月号16ページ)

「消えてゆく姿」というのは、善悪すべての想いや環境に、人の想いを把わせなため、表面に出して使っている言葉なのである。

「消えてゆく姿」という言葉の奥には、永遠につながる善いもの本もの姿がはっきり存在している、消えてゆくに従って、その本ものの姿がはっきり現われて来るのであるという、(1991年10月号10ページ)

「消えてゆく姿」として出てくるのは、あくまで人間自体の本体、本心を現わすために、じゃまになる業生を取り去ってしまふ状態なのである。

その真理を知らない人、そこに現われた不幸災難や、環境の悪さをしっかりとつかんでしまい、せっかく消したものを又つかんで放さぬことになり、二重の因縁として業生の層を厚くしてしまっているのである。」(1997年4月号10ページ)

「人間は現在現われている状態を、実際に今起っている状態と思いがちであるが、現在現われている状態というのは、過去において人間の心の波の中にあつた状態が、今消えてゆくようにして現われて来ているので、そうした消えてゆく姿を把えてどうのこうのと云っている事は、ちやうど幻影をつかんで騒いでいるのと同じ事なのである。この原理を知ることが、宗教の極意でもある。」(1992年1月号11ページ)

「私は観の転換の方法を、仏教の諸行無常という言葉を用いる方向に使う、過去に把われずに、未来の光明に向かって進ませる意味で、消えてゆく姿で未来の光明をつかむ、というふうに説いている。」(1998年11月号15ページ)

「現在現れているのは、分の過去に放った想念だけでなく、違った想い、神様を離れたこの世を亡ぼそうという波が自分に感応して来て、自分の行方になっているのである。」(1992年10月号14ページ)

「私どもの教えというものは、常に人を赦そうとしている。自分の性質が悪いとか、自分の運命は悪いとか、罪におののいている魂を救うために、消えてゆく姿があるのである。自分では背負えない、とても一人では背負えないことを、神さまが消えてゆく姿と云う言葉で、代りに背負って下さるのである。」(1971年3月号10ページ)

「子供が善いのも、お金が出来て生活が楽なものも、過去世の善行為、想念が結

果として今現われているのである。

いい結果も悪い結果も、今は結果なのである。過去世から今日に至るまでの想念行為の結果がそこに現われている。だから我々はごうしたらいいかということ、これから先の運命をつくるのである。過去のごときはもう済んでしまっているし、今のものも済んでいるのである。

今、みなさんはこの道場に座っていらっしゃるけれど、過去世において済んでいるわけである。だからこれから先の人生、また来生、あるいは霊界での姿をつくる為に、これから努力するのである。」(1977年6月号17ページ)

「肉体波動というものの、物質波動というものの中に入って、いろいろな練習をして、苦しみや悩みを通りこして完全円満をそこで現わしてゆく。

そういうことが人間にとって非常に大事なことで、そうなることを神様は修練としてやって下さるわけである。

そして肉体が進化してゆくわけである。そういう為に、神様がこの世界を創っている。」(1977年9月号19ページ)

「悪や不幸のように現われてくるものは、すべてより善いものを出すためなのです。善いものが悪いものにおおわれていて、出られないわけです。本心が現われられない。だから悪いものを表面に出してしまっ、善いものを出さう、現わさうという神様のお計いで、悪いように現われているわけである。」(1972年5月号19ページ)

「業を取りながら、霊身の自分と肉体の自分が調和するために、肉体の生活のあらゆる経験を積んで、肉体にありながらも、神霊の世界そのままの、自由自在の行いができるものになる。そういう修行のため、いろいろな出来事が起

それがあるときには、その中の生命力で、この業がじゃまなものだから、それを押し出そうとして、病気や不幸災難のような形に現われて、消えてゆく姿になってゆく。」(1972年6月号16ページ)

「悪いことや嫌なことがあっても、それは過去世の因縁が、神様の力で消されてゆくのです。その人に一番都合のいいように、過去世の因縁が消えてゆく姿となっている。

うまく守護霊さんが消して下さるのだから、何が出てきても、自分にとって一番いい状態として出て来ているのだ、軽く出して下さるのだ、というように感謝して、守護霊守護神さんと一体になって生きることが大事である。

(1974年4月号21ページ)

「あらゆるものは、過去世の因縁の消えてゆく姿である。消えてしまえば、本来の命そのものの姿が現われる。完全円満性が現われてくる。そこでここへ消してしまうのか。

神様の中へといっても、神様は見えないし、つかむことが出来ない。そこで神様のみ心であり、神様の理念であり、神様が望んでいる世界の大調和、平和、という神様の目的の中に消してしまう。

人間側から「世界人類が平和でありますように」という言葉で、祈りのひびきを出す、神様の愛と人間の願望とが一つになって神と人間とがつながる。

そうすると、神様の大光明が流れてきて、人間の肉体も霊体も霊体も、すべて神と一体化してゆくのである。神と一体化してゆくと、肉体から発する大光明波動、光の波が地球人類にふりまかれるわけである。(1974年6月号17ページ)

「私の説いている消えてゆく姿とは、この現象界で自分や自分の周囲に起って

く悪や不幸は、その人の本心の現われるための、誤った過去世からの消えてゆく姿として解釈しているのだ、そうした消えてゆく姿が出てくるたびに、そこに本心が現われて、小さな悟りのような形になってゆくのである。

悟るということは、それが小さな悟りであっても、その人をおおっている業のすき間から、本心の光が少しく輝いたという事であり、人間が業生から、本来の神の子の姿を現わす一つの状態なのである。

であるからそういう悟りを何度か続けている内に、自分で気付かぬ内に、大悟の境地に近づいている場合が多いのである。「」1976年5月号の8ページ）
「消えてゆく姿」という言葉は、善人たちが少しの事や、過去になってどうにもしようのない事で、自分を責めているのを、すっぱりと赦して下さるようになって、神様が私を通して、世界平和の祈りと組合わせて、説かせて下さったものなのである「」1979年5月号の8ページ）

神のみ心に乗るために現わして消えわたっている

何故消えてゆく姿が現れてくるのか。

大神様は生命の法則であり原理であって、別に人間自体に罰を与えたりすることは無いが、その人間自体が自己の生命の働きをすみやかにするために、自分の肉体や幽体に付いた汚れを、浄め去らなければならないのである。

それが病気となり、貧乏の状態や不幸困難の状態を現出させることとなる。

別の言葉で言えば、宇宙を運行させているやり方と、人間が変わってゆ

く変り方と、でタツと同じように思うって、神々が、守護霊守護神が一生懸命働いて下さっているのだである。ある時は病気や不幸になるかも知れないが、そうやってバランスの取れないズレを消して、合わせてくださいるのである。宇宙の運行の変わり方と、肉体人間の変化の状態が一つにならないと、不幸が出てくるわけである。ずれた分だけ、天変地変も出てくる。

もともとこの世界は、神のみ心によって現わされた世界なので、悪いことのある道徳のない世界なので、悪いように見えるのは、神のみ心がまだはっきり現わされていない、つまり神のみ心の未開発のところ、悪や不幸のようなあがきを見せて、消えてゆく姿（開発されてゆく姿）なのである。ずれた分だけ、姿（なのである）言われています。

「もともとこの世界は、神のみ心によって現わされた世界なので、悪いことのある道徳のない世界なので、悪いように見えるのは、神のみ心がまだはっきり現わされていない、つまり神のみ心の未開発のところ、悪や不幸のようなあがきを見せて、消えてゆく姿（開発されてゆく姿）なのである。「」1979年4月号の8ページ）

「人類が宇宙の法則に外れていて、それがちゃんと法則に乗る時に、浄化作用が起る。例えば骨が外れているものを、元に戻す時には痛みがあるだろう。その痛みの状態として、病気や不幸が現われたりするものである。」

守護霊守護神が、身代りに身に受けて、その痛みを軽く済ませてくれるのである。それが現在の人類の姿なのである。

だから守護霊守護神の力がなければ、人類は一日たりとも生きていけない、という大きな事実には気がつかない。「」1966年1月号16ページ）

「神のみ心から離れているもの、大調和精神のみ心から外れている、そういう業がある以上は、神さまのみ心にすっかり乗れない。

神のみ心にすっきりとつながるのをじゃまする業想念というものを、病気や不幸や災難にして出して、消してしまわなければならない。」(1967年3月号17ページ)

「大神様は生命の法則であり原理であって、別に人間自体に罰を与えたりすることはないが、その人間自体が自己の生命の働きをすみやかにする為に、自己の肉体や幽体に付いた汚れを、浄め去ろうとするのである。

それが病気となり、貧乏の状態や不幸困難の状態を現出させることとなり、人間の本体の方から見て、もう肉体という道具や器が、これ以上使いものにならないと思えば、それを消滅させてしまうのである。

いいかえれば、肉体の方に本体からの生命の補給を止めてしまうのである。それが死という状態となるのであり、人類全般としては大天変地変という形になったりして、地球の大掃除をするという形になって来る。この時には、大神様の生命法則を、滞りなく運行するために働いておられる、守護の神霊や天使たちが、大きく働かれるわけなのである。」(1967年4月号6ページ)

「高次元の存在である霊なる生命が、地上界という低次元の物質波動の世界に調和してゆくことによつて、中和された地上界が生まれてくるわけで、波動が中和されるまでは、右に左に揺れ動き、様々な不調和なる事態が個人にも人類にも現われて来るのである。」(1970年4月号6ページ)

「過去世で悪い業を積んで生まれてくるわけであるから、悪いこともある。けれどそんなものは問題ではないのである。神さまは常に小さく小さく進んでいて

例えば千万円の借金があるとなれば、それを十万円つづ、あるいは一万円つづ返す。その人に返せるような形で、守護の神霊が返させるようにするわけである。大病で死ぬ運命があったとなれば、下痢をした、カゼをひいたということ、小さく消してくれて、ついには千万円なら千万円を、全部返してしまふ。そういうように神さまはして下さるわけである。

神さまに感謝しながら、正しい行いをしてさえゆけば、自分に払えるようにして、その人にふさわしい払わせ方で、小さく小さく払わさせてゆくわけである。」(1971年5月号18ページ)

「過去世の因縁で、あるものは出てくる。出てくるけれど、それが感謝に変えられれば、10出てくるものは1しか出て来ない。それも魂を浄め、高めるための一つの修練なのである。修行が済めば、神様の方ではもう同じ問題を出さない。」(1974年11月号18ページ)

「宇宙の方では、宇宙を運行している神々が、どんどん運行し変化してくる。肉体の方では、守護神が変化させてゆくわけである。

その宇宙の運行の変わり方と、肉体人間の変化の状態が一つにならないと、不幸が出てくるわけである。すれた分だけ、天変地変も出てくるし、戦争も出てくるわけである。

宇宙を運行させているやり方と、人間が変ってゆく変わり方と、ピタッと同じようにしようと思って、神々が、守護霊守護神が一生懸命働いて下さっているのである。ある時は病気や不幸になるかも知れないが、そうやってバランスの取れないズレを消して、合わせてゆく。」(1977年9月号15ページ)

今の自分は創造主の分身

世界平和の祈りを聞いてお祈りしている今の自分は神の子であり、菩薩であり、天使であり、救世主だといわれているのに、今、貧乏である。今、病気である。今、不幸である。そうすると今の自分が不幸のようない気がする。このような現象が起こるのは、靈身の自分と肉体の自分が調和するためであり、肉体にありながらも、神靈の世界そのままの、自由自在の行いができるようになる修行のためなのだ。

では、どうして、神の子としての自分がその自覚がないままこのような状態に甘んじているのでしょうか。

それは、肉体世界に任んでいるうちに、神の子としての自分即ち大我の光（真我）を忘れ、小我の想念（分別心：肉体の心、即ち眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心）だけが自分だと思ってしまうことによるのです。

私たちは、創造主の分身としての意識（真我）に目覚めることが、「真の救い」を得る道になります。そのためには、消えてゆくまで平和の祈りが不可欠であるといわれています。

「今、貧乏である。今、病気である。今、不幸である。そして多くの自分が不幸のようない気がする。しかしそうではない。今の自分とは違うのである。過去の波が、本心の前を通り過ぎてゆくだけなのである。

今の自分とは違う。世界平和の祈りを聞いてお祈りしているあなた方は、神の子であり、菩薩であり、天使であり、救世主なのだ。

今病気だ、今何んだといっているものは、消えてゆく姿なのである。過去の

の、済んでしまったものが現象に現われて消えてゆくだけだから、しかもみえしなければそのまま消えてゆく。」（1962年12月22ページ）

「病気や不幸災難に直面している今の自分は、光輝いている自分、神の子としての自分だ。現われて来るのは、どこから現われて来るかという、過去のズーッと昔から、人間が生まれ変わっているその間の想いがズーッと溜って、それが現われて消えてゆくのであって、今の自分ではないのだ、というのである。今の自分というのは、光り輝いている自分であって神様の子であるわけである。その前をただ通り過ぎていくというのだから、自分が悪いか、人が善いかというのではなくて、それは通るべくして通り、現われるべくして現われるものであって、ただ現われてくるわけである。」（1970年3月25ページ）

「このように誤る想念が病気や不幸災難のような形に現われて、消えてゆくのは、靈身の自分と肉体の自分が調和するためであり、肉体の生活のあらゆる経験を積んで、肉体にありながらも、神靈の世界そのままの、自由自在の行いができるようになる。そういう修行のためだ。」（1972年6月16ページ）

「こんな事態が起っても、病気や貧乏にならうと、それはそれで消えてゆく自分があるのだから、身はたとえ病気で苦しんでいても、病気で苦しむというのは、過去の因縁がそこで消えてゆくだけであって、本当の自分は少しも苦しんでいない。本当の自分は、神様のみ心の中で光り輝いている。苦しんでいくように見えるのは、業の中にいる想いなのである。想いが苦しんでいるのである。」（1973年11月17ページ）

消えてゆく姿のみ教えの正しい行い方

消えてゆく姿のみ教えを正しく行じてゆく上で、留意すべきことを解説させていただきます。

●自分の嫌なものが目の前に現われても、自分の心の中に現われても、これは消えてゆくのだなと思わなければためである。消えてゆく姿だと思わないと、なかなか消えない。消えてゆくのだなと思うことはいうことかというところ、再びいやな事はしないと誓うことである。

●人間というものは、永遠の生命を生かすためには、どんな苦しみを逃げてはいけなものである。苦しみというものは、魂を浄めるものなのである。魂の進化のためには、あらゆる苦しみをなめ、経験することは必要である。それを超えることによって、魂は進化する。鍛えられる時に、普通の場合はすべ人のせいだったり、自分を責めたりすることは魂を鍛えたことにはならないのである。

●どんな痛みがあっても、苦しみがあっても、その想いが、心がそこに扱われないのである。痛みの中に入ってゆかないようにしてゆくことである。「このまじりには、常に自分の意識を光の中に置いていないとできない。

「人が貧乏や病気など、いわゆる不幸で苦しんでいるのは、大きな高い目からみれば、本当はかわいそうではないのである。かわいそうだなと思うのは、肉体そのものが人間そのものであると想う感情から来るものなのである。今、不幸と現われている姿は、本当は天命を現わすために、不幸を消しながら、光へと前進していき姿なのである。」(1995年4月号19ページ)

「自分が悟ったかと思っている時は悟っていない。ためたなあ、自分は何んてためなのだろう」と思っている時は悟っている時である。

だから私は、人が悩みながら来る「あなた心境が良くなったね」というと、向うは実は悩んでいるのである。ところがその悩みが過ぎた後は、パッと上ってゆくのである。」(1991年4月号45ページ)

「一番むずかしいことは、想いが一杯かかっている場合、他人の想いがかかっている時もあるし、過去世のものがドーンと急激に出てくる場合もあるのである。

立派になる手前に、一つの段階を上る場合に、非常に困難が起ってきたり、いろいろ嫌な想いが出たり、悪いことが出て来るのである。今までいい心境だったのに、どうしてこんなと思う位に、悪いものが出てくる。その時が一番大事なのである。その時は一歩ものすくへ上る時なのである。その時に一生懸命やるのである。」(1992年8月号20ページ)

「過去世からの業因縁がグルグル回って出て来るから、良くなったり悪くなったりしているように見えるけれども、それはラセン形に昇ってゆく時なのである。

ラセン形というのは、下ったように見える時もあるが、そういう時は何か業が出て消えている時なので、業が新しく増えたのではないのである。中のものが消えてゆく時に、出て来るのである。

そして、だんだん知らないうちに、高い所へ魂は昇ってゆくのである。下ったように見えても、本当は上っている。絶対下ることはない。

人間というものは、道を求めて正しい道に入ったら、下ることは絶対にない。ただ、下ったように見えるだけである。」(1970年6月号29ページ)

「肉体波動というものの、物質波動というものの中に入って、いろいろな練習をして、苦しみや悩みを通りこして完全圓滿をそこに現わしてゆく。」

そういうところが人間にとって非常に大事なことで、そうなることを神様は修煉させてやってくたさるわけである。

そして肉体が進化してゆくわけである。そういう為に、神様がこの世界を創っている。」(1971年9月号19ページ)

「悪や不幸のように現われてくるものは、すべてより善いものを出すためなのである。善いものが悪いものにおおわれていて、出られないわけである。本心が現われられない。だから悪いものを表面に出してしまっって、善いものを出さう、現わさうという神様のお計いで、悪いように現われているわけである。

(1972年5月号19ページ)

「業を取りながら、霊身の自分と肉体の自分が調和するために、肉体の生活のあらゆる経験を積んで、肉体にありながらも、神霊の世界そのままの、自由自在の行いができるようになる。そういう修行のために、いろいろな出来事が起って行くわけである。

それがある時には、その中の生命力で、この業がじゃまなものだから、それを押し出さうとして、病気や不幸災難のような形に現われて、消えてゆく姿になつてゆく。」(1972年6月号16ページ)

「自分の嫌なものが目の前に現われても、自分の心の中に現われても、これは消えてゆくのだなと思わなければだめである。消えてゆく姿だと思わないと、なかなか消えないのである。

消えてゆくのだなと思いついては、いつかとうとうと、再びいやな事はしな

「悪いことや嫌なことがあっても、それは過去世の因縁が、神様の力で消されてゆくのである。その人へ「一番都合のいいように、過去世の因縁が消えてゆく

姿になっている。

うまく守護霊さんが消してしまふのだから、何が出てきても、自分にとって一番いい状態として出て来ているのだ、軽く出してしまふのだ、というように感謝して、守護霊守護神さんと一体になって生きるということが大事である。

(1974年4月号21ページ)

「この肉体に生まれて来て、何にも苦しまないで、何にも嫌な想いをしないで、生きてゆくことはないわけである。何かしら苦しみがあり、耐えることがあり、悲しみがあつて、そして業は消えてゆくのである。魂が鍛えられるわけである。苦しみがあつた、悲しみがあつた、嫌な想いがあつた。

そこで魂は浄められ、鍛えられる。鍛えられる時に、普通の場合はすべての人にしたり、自分を責めたりする。

せっかく魂が鍛えられて業が消えてゆくのに、そこで消さないわけである」(1974年10月号18ページ)

「例えば自分の生活環境が苦しかったとする。病気だった、貧乏だったとする。しかしそれは過去世の因縁としてそこに来ているのだから、それは消えてゆく姿なのである。本当の自分は神さまと一体なのだから、苦しいも入ったくれない。ありがたうございます。神さまありがとうございます、と言っている方がいい。」(1975年7月号24ページ)

「一般大衆と共に一緒に同悲同喜する、大衆と同化しながら大衆を導いてゆく、という立場もあるわけである。私はそういう立場である。イエスさんもお釈迦さんもそういう立場であった。

お釈迦さんでもいろいろな病気をしたり、痛みはあるわけである。ただ、どこが違うかという点、どんな痛みがあつても、苦しみがあつても、その想い

が、心がそこに把われないのである。痛みの中に入ってゆかない。

苦しみの中に入ってゆかないのである。痛みは痛み、苦しみは苦しみ。そのまま流れて消えてゆく姿。想いが追いかけていかないのである。

みんな同じように苦しみ、同じように悩み、同じ立場でいて、しかも同じにならない。和して同せず。痛みの中に想いが出ない、苦しみの中に想いがいないのである。」(1977年6月23日スピーチ)

「人間というものは、永遠の生命を生かすためには、どんな苦しみをも逃げてはいけないのである。

苦しみというものは、魂を浄めるものなのである。魂の進化のためには、あらゆる苦しみをなめ、経験することは必要である。それを超えることにより、魂は進化する。」(1979年11月号14ページ)

大我の光(真我)を取り戻した時すべては光となる

消えてゆく姿のみ教えを行じていく上で、自分の意識を祈りや印によって大我の光の中にはいつていることが不可欠なことはこれまで消えてゆく姿のみ教えを整理してゆく中でお分かりになれたことと思います。

消えてゆく苦悩の中に自分の意識をおいたままだと、苦悩と分離の波動の低い世界から解脱することはできないのです。

大我の光の中に入ると、大我の光の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統べてしまつて、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もして、安心は命じていくと言われているのです。

大我の光の中にはいつていくことを繰り返しているうちに、自分の苦悩のほか、自分に感応して来ている神様を離れたこの世を「ほろろ」という波さえが浄められ、魂は進化し自分の神聖を現わしていく。即ち肉体にありながらも、神霊の世界そのままの、自由自在の行いができるようになるのであります。

消えてゆく姿は、追わない限り、苦悩が甦ることはなくなるのです。消えてゆく姿は、神聖を現すプロセスの幻影であり、仮想世界の出来事なのですから。

これら大我の光に入り、自分の想念や思考を整理することは、自分でやる以外ないのです。それこそが創造主の分身としての意識の在り方なのです。現在鏡の中に見える自分と、自分の前に現われる、いいことも悪いこともすべては、創造主の分身としての自分が創造した姿なのです。そして舜々刻々自分自身がそれらを通して魂を進化させているのです。ですから自分の日々の思いの在り方がいかに大切かが分かります。

五井先生の歌に

うつるもの おのすうつりておのす消ゆ 我はただひそかなり
があります。

これは自分の意識を大我の光の中においていなければ、このような心境は得られないでしょう。この歌を唱えるだけで、大我の光の中に入った感覚、無心になるのは、私だけでしょいか。